



“環境対応先進技術”と “小型・低価格・低燃費の クルマづくり”

三菱自動車工業株式会社
取締役社長

益子 修

2008年9月に起きたリーマンショックをきっかけとした世界経済危機の中で、自動車産業は過去に経験のない大きな打撃を受けました。

それから2年近くが過ぎ、世界経済は漸く落ち着きを取り戻し、自動車産業にも明るさが見えてきました。しかし、その自動車産業の回復を牽引する需要構造は、リーマンショック以前とは大きく異なっています。日・米・欧を始めとする先進諸国の回復は、政府の景気刺激策が主導したもので、自律回復の力強さが感じられません。加えて、環境意識の高まり、環境関連法規制強化の動きから、CO₂排出量の少ない環境対応車や低燃費の小型車に需要が移行しております。一方、世界的な総需要の回復は新興国での景気回復に支えられています。特に、新興国における中間所得層の台頭が自動車需要増大の源泉であり、これら中間所得層向けのクルマ作りが求められるようになりました。

当社では、このような環境変化に対応し、厳しい自動車業界の中で勝ち抜くためのキーワードとして“環境対応先進技術”と“小型・低価格・低燃費のクルマづくり”を掲げています。

一つ目のキーワードである“環境対応先進技術”

については、「世界環境デー」である2009年6月5日、走行中のCO₂の排出量がゼロである究極の環境対応車、新世代電気自動車『i-MiEV（アイ・ミーブ）』を世界に先駆け発表し、フリートのお客様を中心に2009年度は約1,400台販売しました。また、海外へも、右ハンドル市場を中心に約200台を出荷しました。2010年度は、国内では一般のお客様にも販売を開始、さらに、2010年末から左ハンドル市場も含め欧州市場ほか、海外での販売も本格化します。また、PSA プジョー・シトロエン向けOEM供給も開始し、2010年度は9千台の販売を計画しています。その後、2011年度は北米向け、2012年度には中国の一部地域へも販売を拡大するなど、世界の主要市場に続々と『i-MiEV』を展開する計画です。

さらに、電気自動車に関しては、軽商用車など車



量産電気自動車『i-MiEV（アイ・ミーブ）』

種展開の拡大も計画しており、電気自動車のラインアップを充実させたいと思っています。

また、シティ通勤用としての電気自動車に対し、長距離移動の利用頻度が多いタイプのクルマについては、EV 技術を最大限に活用したプラグインハイブリッドシステムを導入し、2013 年に市場投入すべく準備を進めています。

2つ目のキーワードの“小型・低価格・低燃費のクルマづくり”は、主にアセアン、中国、インド、ブラジルに代表される新興国や資源国での中間所得層の需要に応えるものです。リーマンショックからの早期回復に加え、さらなる自動車需要の増加を支える要因が中間所得層の台頭であり、これら新興国では、今後も需要の増加が期待されています。例えば、2009 年の中国の自動車販売は 1,364 万台で米国を抜いて世界一の自動車販売国となりました。2010 年も中国の自動車販売は 1,500 万台を超えることが予想され、世界一の座を維持し、さらに伸長することは間違いありません。また、インドやブラジルでも同様に二ケタの需要の伸びが予想されており、これら新興国が益々重要な市場となっています。また、先進国でも環境意識の高まりから、小型・低燃費のクルマに需要が移行しています。

当社は、先進国での小型車需要への移行、新興国の中間所得層のニーズに対応する新しいカテゴリーのクルマとして、「グローバルスマール」と呼ぶ小型・低燃費・低価格のクルマを開発中で、2011 年度より全世界市場に投入する計画です。

この「グローバルスマール」の開発には、当社の前身である新三菱重工業で「三菱 500」発売以来 50 年に及ぶ、軽自動車を含めた小型車づくりのノウハウ

を生かし、実用的かつ低価格なクルマを実現します。また、主要市場に近く、生産コストで有利な地域で、年間 40 万台以上の生産台数規模を確保し、量産効果を最大限引き出すことで、グローバルで通じる商品力と価格競争力を高めていきます。

T 型フォードが世界ではじめて自動車の量産を開始したのが 1908 年。その丁度 100 年目に、世界的な自動車需要構造に劇的な変化が起きたことは決して偶然ではないと考えています。自動車業界は、かつて経験したことの無い大きな試練を経て、100 年間続けてきた大量生産・大量消費のビジネスモデルから、構造改革を迫られています。大企業の破綻や新興勢力の台頭、新たな組み合わせによる再編成など、各社それぞれ将来に向けた対応に工夫をしています。当社も、この社会環境や消費者ニーズの変化を大きなチャンスと捉えていきたいと考えています。

最近、マスコミを中心に「このような厳しい情勢の中、生き残っていただけますか？」という質問を多く受けます。私は「大きいだけでは生き残れない。世界に通用する独自技術を持つことで、生き残り競争に勝つことができる」と信じています。ダーウィンの自然淘汰説の中に、「適者存在」というのが出てきます。大きいから、強いから、または早いから生き残れる訳では無い。環境の変化に適応したものだけが生き残る。生き残る為には、新たな環境、新たな需要に対応できる独自技術、世界に通用する技術を持てるよう、自ら変化することに積極的でないとダメなのです。「適者生存」の考えが正しい事を証明する為に、当社は社員一同、今一度、一丸となって新たな挑戦を始めていきたいと考えています。



三菱プラグインハイブリッドシステムを搭載した『三菱コンセプトPX-MiEV』